

岸和田城(岸ノ和田城, 滕城, 蟄亀利城, 千亀利城) (府史跡, 続百名城)

(岸和田市岸城町)

岸和田城（きしわだじょう）は、大阪府岸和田市岸城町にあった城である。別名千亀利城（ちきりじょう）。江戸時代には岸和田藩の藩庁が置かれた。城跡は大阪府の史跡に指定されている。

概要

建武元年（1334 年）前後に、和田高家が現在の岸和田城跡から約 500m 東（野田町 1 丁目周辺）に岸和田古城を築城。「岸の城」とも言われた。その後『日本城郭大系』によると信濃泰義によって現在地に移築されたとしている。

羽柴秀吉の紀州征伐の拠点として再築城され、その急ごしらえで造られていたものを、小出秀政が 5 重天守を上げる本格的な構えとした。松平康重の代に総構えと城下が整備され、岡部宣勝の頃、城の東側に 2 重、西側に 1 重の外堀と寺町が増築されている。文政 10 年（1827 年）に天守を焼失。以降再建されないまま、明治 4 年（1871 年）に廃城とされ、まもなく破却された。

岸和田城は猪伏山（いぶせやま）と呼ばれた小高い丘の上にあり、本丸と二の丸を合せた形が、機の縦糸を巻く器具「滕」（ちきり）に似ていることから蟄亀利城（後に千亀利城）と呼ばれるようになった。城内にある岸城神社は千亀利と「契り」とをかけて、縁結びの神社として知られている。桜の季節は花見の名所となる。

沿革

和泉国守護であった楠木正成が甥の和田高家を岸和田に派遣して岸和田古城を築かせた。「岸」と呼ばれていた当地に和田氏が城を築いたことによって「岸の和田」と呼ばれ、「岸和田」へ変化したと言われている。岸和田古城（岸の城）がいつごろから現在の岸和田城に移ったのか明確でない。守護が楠木正成から山名氏清に代わり、和田氏もその一族と思われている信濃氏を入れたと伝わっているので、『日本城郭大系』によるとおそらく応永年間に現在の地へ移築されたと解説している。ただし、これらの文献の出典を遡っても江戸時代初期にまでしか到達せず、しかも岸和田に城があったことを示す最初の一次史料は後述の永禄元年（1558 年）に三好氏が同城に入ったことを記した浄心院快栄書状（永禄元年 12 月 12 日付、京都府立総合資料館所蔵「板原家文書」）まで下ることになる。山中吾朗は当時の和泉国の状況から岸和田城の築城をどんなに早くても 15 世紀とし、楠木氏に関する伝承は江戸時代に盛んになった同氏崇拜の風潮によるものとする。

応永 15 年（1408 年）細川頼長が和泉国の半守護となり岸和田城の城主となったようで、その後和泉守護細川家が岸和田城と関わりを持っていく。明応 9 年（1500 年）には、細川元有が畠山尚順に攻められ岸和田城で討ち死にすると、守護代として松浦肥前守が城主になっていたと思われる。松浦氏は三好政権の下でも和泉国における支配的な地位を確保し続けていたとみられているが、当時の当主であった松浦万満は幼少であり、三好政権は松浦万満の立場を認めつつもその後見を口実に岸和田城に兵を進めることになる（「九条家文書」所収:永禄 2（3?）年 4 月 23 日付三好長慶書状）。

永禄元年（1558 年）には、三好義賢、十河一存、安宅冬康の三好長慶の家来衆が城内にいたようで、永禄 3 年（1560 年）には三好義賢が大規模な改修をし、十河一存、安宅冬康を総大将に 2800 兵を籠城させた。この時には岸和田城も相当な規模となっており、阿波国、讃岐国、淡路国などから摂津国、京への交通の要となっていた。現在の二の丸（二の丸公園）にある武道場の建設時に、今の石垣の内側に更に古い石垣の列が発掘されたことにより、当時は海に面した二の丸周辺が主郭ではないかと思われ、海を背負った城郭の基礎がこの時に完成したのではないかと推測されている。永禄 5 年（1562 年）畠山高政との久米田の戦いで三好義賢が戦死すると、安宅冬康は岸和田城を退き代わって細川刑部が城主となった。しかし同年

の教興寺の戦いでは畠山高政が大敗すると、再び三好長慶軍が岸和田城を回復し、松浦肥前守虎が城主になったとされている。だが、当時松浦氏は一族に内紛を抱えていたらしく、この時城主になった肥前守虎は万満の対立者であったと推定され、後に同じ肥前守と名乗った肥前守光に城主が交替したことが確認できるなど、松浦氏は混乱のうちに衰退することになる^[1]。

その後松浦氏が天正始めまで城主としていたようが、天正3年（1575年）にはその家来であった寺田又右衛門、寺田安太夫（松浦宗清）兄弟が城主となったようである。天正4年（1576年）織田信長が石山本願寺を攻めた。天王寺の戦い（1576年）である。そこに毛利氏が援助のため兵糧を貝塚に運搬し、これを迎え討つため和泉国水軍が立ちはだかったが、大敗し木津口へから石山本願寺へ届けた（第一次木津川口の戦い）。和泉国水軍は寺田又右衛門、寺田安太夫兄弟などわずかの部隊だけになってしまったようである。天正11年（1583年）豊臣秀吉は、岸和田城を中村一氏の配下に置き、根来衆、雑賀衆、粉河衆などの一揆衆討伐を命じる。そんな中翌天正12年（1584年）小牧・長久手の戦いの留守を狙って、根来衆、雑賀衆、粉河衆連合軍は総数3万兵が侵攻し岸和田城に攻城戦を仕掛けてきた。これに対して城兵8000兵で対抗した岸和田合戦である。石山合戦で石山本願寺を開城した頭如軍であったが今度は豊臣秀吉に合力してきた。豊臣秀吉軍は根来衆、雑賀衆、粉河衆連合軍を追討するため、翌天正13年（1585年）に岸和田城に入城し、そこから貝塚の諸城を落城させ最後に積善寺城、沢城を開城させた（千石堀城の戦い、紀州征伐）。

その後豊臣秀吉は小出秀政を岸和田城の城主とした。最初4千石であった小出秀政の知行も、文禄3年（1594年）1万石、翌文禄4年（1595年）3万石に拡大した。『岸城古今記』にはこの年から天守が築城され慶長2年（1597年）に竣工したと記している。

慶長19年（1614年）、大坂冬の陣では松平信吉が城主となり、のちに北条氏重、その後は小出吉英、元和5年（1619年）松平康重が城主となったようである。その後寛永8年（1632年）に伏見城が破却されると矢倉などが移築され城郭が強化された。その松平康重も山崎城へ転出すると寛永17年（1631年）、高槻城より岡部宣勝が入城し、6万石の城主となった。以後岡部長職の時代まで岡部氏13代の居城となる。明治4年（1871年）廃藩置県により岸和田城も廃城となる。

紀州監視の岸和田城

岸和田城は大坂城と和歌山城の中間地点にあり、岡部宣勝は徳川家康の妹の子で、紀州藩の監視の意味もあったとされている。徳川御三家の一つである和歌山城も徳川幕府の相互監視政策に例外は無く、徳川家康の子徳川頼宣の抑えの城としても城郭が整えられたのでは思われている。『深訪日本の城』によると、江戸城で徳川頼宣と岡部宣勝が対面した時、徳川頼宣が

「貴殿が岸和田に移封されたのは、われらの目付のためだという風聞であるが、いかなる計策をもって紀伊をおさえるつもりか」

と問いかけてきたのに対して、岡部宣勝は

「われら小藩のものが、大大藩の貴殿のおさえるほどの策略を持ち合わせるきずもござらぬが、ただ足の裏に米粒がついたぐらいのことしかできませぬ」

という返事をした、と解説している。このようなやり取りがあったとされているが両藩は戦を交えることはなかった。

しかしながら、岸和田城の縄張が和歌山側より大坂側に厚い防御線を設けていることなど、矛盾する点も指摘されている。

城郭

『泉邦四県石高』によると、

“ 今之城、天正之比迄天守もなく堀、矢倉も龜相成に依て伏見之御城天守、矢倉門等迄被成御曳、 ”

石垣出来、小出播磨守御代之事、二、三之丸迄出来、又大坂御陣後、通筋堺町之門、堀、石垣、浜手石垣、南住間還之入口、門、堀、石垣等出来、須田次郎太郎殿奉行になり

-泉州四県石高

とあり大坂の役後に本格的な城郭、総構えが整えていたのではないかと推察されている。東西は約 370m、南北は約 650m の平城で、5 万 3 千石の城郭であった。

本丸

天守

現在の天守は 3 層であるが、正保年間に幕府へ提出された正保城絵図「泉州岸和田城図」では 5 層の天守が描かれている。初層は千鳥破風であったが、後に唐破風が取り入れたように見受けられる。文政 10 年（1827 年）11 月 20 日落雷によって消失し、その後江戸幕府に復興願いを届出済みで、それによると 3 層の天守、2 層の小天守とあるが結局は再建されなかったようである。天保年間に描かれた「岸和田城図」には隅櫓しか描かれていないので、この時には既に天守はなかったものと思われる。明治時代以後、天守台の石垣の横に一段低い小天守台があったと言われているが、これは二の丸にあった伏見城の移築櫓が 3 層であったため、それを代用していた可能性も指摘されている。天守台の大きさは南北、東西共に約 18m、面積は 336m²で、当時の岡山城と同規模の天守だったと思われる。現在の天守の高さは約 22m であるが、当時の天守の高さは 18 間あり、今の天守より約 10m は高かったと思われる。また、本丸の面積は約 4702m²ある。

現在の天守は昭和 29 年に市民の寄付や旧城主の子孫である岡部氏の要望などにより再建された。総工費は当時の金額で 3460 万円、設計士は一級建築士池田谷久吉、施工は岩出建設株式会社、工事は昭和 29 年 1 月 6 日起工、同年 11 月 13 日竣工。また平成 4 年には大改修工事も行なわれた。総工費は 3 億 7801 万円、設計は株式会社比石英二建築事務所、施工は岩出建設株式会社、工事は平成 3 年 8 月起工、平成 4 年 8 月 31 日竣工。

八陣の庭

重森三玲の設計で、昭和 28 年（1953 年）7 月に着工し同年 12 月竣工した砂庭式枯山水庭園である。庭園は諸葛孔明の八陣法をテーマにしたとされ、中央の大將と先端の天・地・風・雲・鳥・蛇・龍・虎の各陣に石組みが配されている。

二の丸・二の曲輪

二の丸

二の丸には「二の丸御殿」と伏見城から二の丸北隅に移築されたとされる「伏見櫓」があった。戦国時代まではこちらが本丸であったと思われ面積は約 8000m²ある。

現在は二の丸公園として整備されている。

昭和 32 年に 20 匹のアカゲザルが市民から寄贈されたことをきっかけに猿舎が二の丸公園内に整備され、昭和 50 年頃には 40 匹まで増えたがその後皮膚病などの流行で減少し、平成 23 年 11 月 24 日には最後の 1 匹が岸和田市中央公園に移送されて猿舎は終焉を迎えた。なお、移送された最後のアカゲザルは平成 24 年 1 月 5 日に同公園で死亡した。

平成 24 年 5 月 28 日に二の丸公園内にイタリア料理店 CLUB CONTRADA が開店。

二の曲輪

二の曲輪は内堀の外側、一重目の外堀の内側にあり、主な施設としては「太鼓部屋・軍科倉庫」、「極楽橋」、「向御屋敷」、「家老中家屋敷」、「新御茶屋」、「家老久野家屋敷」、「御薬園」、「牢屋」、「西大手門」などがあったが、現在これらの施設は消滅している。またこの二の曲輪に

は鎧のような形をした「あぶみ堀」があった。これは二の丸が本城であった頃、馬出の名残ではないかと考えられている。また「新御茶屋」、「薬草園」の跡地に明治4年（岸和田城の廃城年）から10ヵ月をかけて造営された「五風荘」がある。回遊式の日本庭園で3000坪の敷地があり主屋と庭園を見渡せる3つの茶屋がある。庭園の見学は自由となっている。なお、五風荘は現在がんこフードサービスが日本料理を提供する店舗として活用している。

犬走り

現存する内堀石垣の下部に周堤帯が存在する。これを犬走りと呼ぶ。城の防衛という見地から見ると非常に不利であり、なぜこのような構造にされたかはわかっていない。脆い泉州砂岩で造られた石垣が崩れるのを防ぐためという説が有力である。この犬走り周辺の石垣は平成11年（1999年）6月28日の豪雨で崩れ、今は強度のある花崗岩で補修され色の違う石垣が見受けられる。また補修工事の時に、百数十基の墓石が発見された。年号は、永正、天文、永禄等16世紀前期-中期のものが多く、本丸の石垣は永禄年間（1560年）以後であることが裏付けられた。

その他曲輪

上記以外の曲輪群として、

- 三の曲輪
- 町曲輪
- 外曲輪

等があり、町曲輪・外曲輪には紀州街道が通されていた。

- 天守 1棟（小天守もあったという説もある）
- 櫓 15棟
- 弓鉄砲挟間 926ヵ所

Wikipedia による



